

閑上の海

夫呼べば夫の声する

娘呼べば娘の声する

閑上（ゆりあげ）の海（宮城県 須藤 柏）

これは、朝日歌壇に掲載され、函館出身の作家、宇江佐真理さんの「はるかなる思い」という一文（3月6日付道新）の中でも紹介された歌です。

「閑上」というのは、宮城県名取市の閑上地区ことで、人口約7千人の大変活気のある漁港の街であり、その前に広がる海は、サーファーで賑わっていました。その街も、美しい砂浜も、3月11日に発生した東日本大震災の大津波によって跡形もなく消えてしまいました。

テレビで放送された津波の衝撃は、余りにも大きなものでした。美しい大地を黒褐色の固まりが覆い尽くしていく様は、今でも忘れることができません。

津波が呑み込んでいったものは、人の命だけではありません。人々の間に交わされた愛情や思い出、暮らし、そして夢、そうした人々の日々の営みを、あの黒褐色の固まりは破壊していったのです。

言葉を尽くせば尽くす程、現実から遠くなってしまふ感じがするのは、悲しい限りです。

「沖に向かって、夫（つま）の名を呼び、娘の名を呼べば、寄せる波の音の中に、夫や娘の声が聞こえてくる」と詠った冒頭の歌は、残された者の叫びにならぬ叫びであり、怒りや悲しみまでが伝わってくるようです。

あの日から1年。「もう1年も経ってしまったのか」という思いと同時に、「まだ1年しか経っていない」という思いが錯綜しています。

生活の再建に向けて立ち上がり、活動を始めた人がいる一方で、あの日以来時計が止まったまま、先の見通しを立てられずにいる人がいます。冷静に忍耐強く災害に立ち向かい、世界の人々に感銘を与えた被災者がいる一方で、空き巣を狙った犯罪も多発しています。被災地でボランティア活動に汗を流している人がいる一方で、瓦礫の受入を拒む人たちもいます。政治も行政も、被災者

に寄り添うべき時に自分たちの利害を優先しているようにしか見えません。

私たちは、この1年、人間の強さ、美しさと同時に、弱さ、卑劣さをも見せつけられました。勿論、自分自身も偉そうなことはいえません。せいぜい募金に協力する位のことしかできず、自分の無力さを痛感しているのですから。

ただ、3月11日の東日本大震災によって、私たちは、非常に多くのことを学びました。

平凡だけれど、普通に生活できるということが如何に素晴らしいことか実感しました。

また、あの未曾有の大災害の中でも、人間には、夢や希望に向かって立ち上がろうとする強さがあるということを目の当たりにしました。人と人は助け合うことによって、途轍もなく大きな力を発揮するものだということも、再認識しました。

私は、3月11日のことは忘れません。そして、被災者の悲しみに少しでも寄り添っていけるよう努めていきたいと思っています。(塾頭 吉田 洋一)